
Alchemist farthest ~ 最果ての錬金術師 ~

ティ・ラ・アイメリッタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Alchemist farthest 最果ての錬金術師

【Nコード】

N3988V

【作者名】

ティ・ラ・アイメリッタ

【あらすじ】

病死したはずの僕がひょんなことから記憶を引継ぎ、更に特典まで貰って転生するお話

終りの始り（前書き）

懲りもせずまた新たな作品に手を付けてしまいました

アイデアは浮かべどモチベーションがあがらずにそのまま放置
という可能性が無きにしも非ずですが

たまーに更新していきたいと思いますので今後もよろしく願います

では、お楽しみ頂けたら幸いです

終りの始り

ああ、閉じていく

僕の世界が閉じていく

力が抜けていく

全て抜け落ちて逝く

どこまでもどこまでも墮ちて逝く

これが“死”か

僕は、僕の…人生は…何を…残して…何の意味が…あったのか
な…

でも、いいや

僕は精一杯生きた

今まで…ありがとう……

ここは？

僕はいつたい？

“起きたようだね”

えっと、あなたは？

“ふふ、大丈夫だよ。君の疑問には全て答えてあげる”

えっと、ええっと…

“落ち着いて、ゆっくりと現状を把握していこうか”

スーハーと深呼吸をして僕は少しでも気持ちを落ち着けようとしてみた

僕は病気で…

“うん。そうだね、君は君の自覚通りあの時死んだよ”

じゃあここは死後の世界？天国？地獄？

“そうだね、ここは死後の世界とも言えるし、そうでもないとも言える。簡単に言えば私の家だ”

あなたの？

“そうだなあ。解り易く、簡潔に言葉にするならば私は所謂神様つて奴になるね”

かみ…さま…

“とはいってもこれは今言った様に解り易い表現にしたら私は神様
ってだけさ”

つまり…何者でもあつて何者でもない…

“そう君であり、君でない。神であり、神でない。悪魔であり、悪
魔でない。おつと話が随分逸れちゃったな。まあ私が何者であつて
も君の害になるつもりはないよ。だから気にしないで”

あ、はい。じゃあ僕はいったいどうしてここに？

“うん。やっと核心に入ったね。そうだね、君は死んだ。そして輪
廻に還るところだったのを私がたまたま釣上げてしまったのさ”

輪廻に還る…釣上げる…

“そう、本来なら君はあのまま自我を失つて新たな生命として転生
するところだったんだけどね、たまたま運良く？いや、悪いのかな
？まあ私の下に来てしまったわけさ”

ええつとそれで僕はこの後いつたい？

“うん。せっかくだから君にちょっとしたサービスをあげようかな
と思つてさ”

サービス？

“本当はキャッチ&リリースの精神でいかないといけないんだけど
ね。まあちよつとした気まぐれさ”

ええっと、ありがとうございます？

“ふふ、君にあげようというサービスはね、記憶を持ったまま転生させてあげようというものさ。そして君が望むなら他にも幾つか特典を付けてあげようと思ってね。例えばゲームや漫画と等に近似した世界とかね”

えっと、近似した世界っていうのは？

“そうだな、ああいう世界はすでに完結した世界Aと思ってもらえばいいよ。そこに今まで違う世界で生きてきた君が生まれるとその世界はAからA' になるのさ。バタフライエフェクトって奴が関係してくるね。ああ、世界Aの方は気にしないでいいA' はAじゃない。君が生まれたからといってAの世界が消えて無くなるわけじゃない。そうだな、二次創作ってあるだろう？あんな感じだね”

???

“ふふ、ごめんよ。余計に解り辛くなつたかな？まあ、気にしないでいいってことさ。ゆっくりと考えるといい。時間はたっぷりある。それに少し私の相手をしてくれないかな？今まで暇で暇で仕方なかったんだ”

あ、はい

“ふふ、なかなか楽しかったよ。こんなにおしゃべりしたのは何時

ぶりかな？”

僕も楽しかったです

“さあ、君の願いも決まったようだし訊かせてもらえるかな？”

ええと、あの転生先はガストっていうゲーム会社のアトリエシリーズでお願いします

“うん、いいとも”

あと、あのFate/stay nightっていうゲームに出てくるキャスターのスキルが欲しいです

“ふむ、道具作成と陣地作成だね？”

はい

“よし、わかったよ。以上でいいのかい？”

はい

“じゃあ、もしよかったらどうしてこの世界で、そのスキルがいいのか教えてもらってもいいかな”

えっと、あのゲームは基本的に平和な世界だからっていうのと、スキルはあつたら楽しそうだなと思ったからです

“ふふ、そっか。そうだね、楽しんで生きてくるといい。それが一番大事だ。じゃあ行ってらっしゃい！”

はい！行ってきます！ありがとうございました！

言葉を交わしたとたんに僕は僕の意識が飛んでいくのを感じた…

さあ、僕の第二の人生が始まる！

01 | 僕は元気に生きています

— めたとかきにしちゃだめだめよ！？だって…いまさらでしょ！！

僕の意識が完全に覚醒したのは僕が5歳になってからぐらいのことだった。

いや、完全にという表現は正しくないかもしれない。

なぜなら僕の意識は急に覚醒したわけではなく少しずつ醒めていったからだ。

急に僕という人格が発生したわけではなく、あくまでこの体の人格として、性格として、個人として生れ落ちてからすすくと成長したのだろっな。

まあ何が言いたいのかというとだ、僕にはこの世界の住人であるというきちんとした自覚がある。

そうだな、家族を家族として認めるというのかな？

違和感を感じないといった方がいいのかな？

まあ、前世に引きずられること無く素直に子供として生きている。

ちなみに、周囲には早熟な子として認知されているようだね。

「おーアリアちゃんじゃねーか！どうしたんだ？お使いか？」

おっと、通りすがりのおじさんに話しかけられたや。

「こんにちはー。今日は父さんの誕生日だからね。母さんがご馳走を作ってくれるんだ！その材料を買いに行つて来るんだよ」

「おお、そうかいえらいねー。うちのガキとはえらい違いだぜー！」

「えへへー。じゃあ、行つてくるねー。ばいばーい」

「おう！気をつけて行くんだぞー」

「はーい」

ふふふ、どうだいこの僕の子供っぷり！

といつても本当にこれが素なんだけどね。

演技なんかしてないよ。

僕は少し早熟な正真正銘のガキなのさ。

おつと目的のお店に着いたや。

「おや、いらしゃい。今日はどうしたの？」

「えつとねー、これとあれ下さいな」

「はい、鳥腿と手羽先ね。何グラムいるのかな？」

「んーと、腿1？と手羽先300gでおねがいします」

「はい。1040コールになりまーす」

「えつと、はい」

「はい、1100コールね。おつりの60コールよ」

「ありがとうございますたー」

「うん。いい子だねー。ねえアリアちゃん、今日はお母さんどうしたの？お使いかな？」

「そうだよ。今日は父さんが誕生日だからね。そのお使いなんだ。母さんは多分今頃ケーキ作ってるんじゃないかなー」

「そっかー、お父さんも喜んでくれるね！」

「うん！じゃあ僕はそろそろ帰るよ」

「はい。気をつけて帰ってねー」

帰りの道中も行きと同じようにおじさんや、おばげふんげふん、お姉さんたちとお話しながら帰ってきた。

おねえさんですよー。みなさんおわかくおきれいですよー。

とまあいつもどおり平和な町を帰ってきたのさ。

「ただいまー！」

「お帰りなさい、アリアちゃん」

家に帰ると母さんはもうケーキを作り終えていたらしく掃除をしていた。

ちょっと遅かったかな？うん、反省。

「はい、買って来たよー」

「ありがとう。じゃあメインディッシュを作るわねー。時間がかかるだろうから遊んできなさいー」

「はい、いつてきまーす」

母さんは料理っていうか家事全般が大得意だからなー。晩御飯がとても楽しみだ。

晩御飯はとてもおいしかったです。

ケーキは絶品でした。

ん？いろいろと跳びすぎだっ？いいの！

今回のお話はプロローグに過ぎないんだから！

メタとか気にしないの！今更でしょ！！

01 | 僕は元気に生きています（後書き）

今更でしょ!!

ということでは投稿！

さて結構時間かけてるつもりなのになー

どうしてこんなに短いのだろう？

まあ精進あるのみですな

ということでは引き続きよろしく願いしますよー

02 | 現状把握は大事なの

「ここはどこ？わたしはだれ？そしていまはいつなん
だい！？」

今更だけどさ、僕の名前を覚えてなかったよね？

アリアだろ。だって？

違う違う、アリアは愛称さ。

そして僕の性別も勘違いしてる人がいるかもしれないから教えて
おこうかな。

「初めまして、アテオリア・カテライトです」

いや、別に誰もいないところに向かって自己紹介してるようなち
よつと頭の可哀そう子なんかじゃないんだからね！

ごめんなさい調子に乗りました。

今、僕は学校に来ています。

まあ寺子屋みたいなもんだと思ってもらえればよろしいかと…

そこに今日から通うことになったのです。

つまり上記の台詞は挨拶となっておりますよ。

そして今の台詞に興味と特技をでっち上げて自己紹介させていた
だきました。

画面の前のみんなには ひ・み・ちゅ

はいごめんなさい。また調子に乗りました。

まあ、別に言っただのこともないから割愛させてもらいまーす。
さて、ちゃんと僕の前には20人ぐらいの僕とそんなに年の変わ
らない子供たちがいらっしやいますよつと。

「はい、よく出来ました。アテオリア君は今日からここでみんなと
一緒に学ぶお友達になります。みんな仲良くしてあげてねー」

「「「「「はい！！」「」「」「」

「よろしくー」

さて、今アテオリア君って言われたから分かってもらえると思う
けど僕は男です。

まあ近所の人たちには小さい頃からの付き合いって奴でアリアち
ゃんって呼ばれてるわけさ。

そして僕は今6歳になりましたー。

ここは所謂小学校みたいなものと考えてもらったらいいよ。

早い子は4歳ぐらいから、遅くて8歳ぐらいからかな？通いだすのは。

一応義務教育みたいな感じでみんなここに通ってはいるみたい。

生きていくのに必要なことを教えてもらったりするわけさ。

例えば読み書きだね。

他にも四則演算とかいろいろと。

そしてここは実力しだいでどんどん学習内容を進めていけるのさ。

まず最初に、ここに入るときにテストを受けてその実力に見合ったレベルから教えてもらえるんだよ。

それでさ実は僕、この地がどこだかまだ分かってないんだよね。

ザールブルグなのかグラムナートなのかアーランドなのか、はたまたアールズだったりケントニスだったり？もしかしたらゲーム中に名も無かった辺境の地だったりするかもしれないね。

とまあそんなわけで6歳となったことだし僕もここに通うことにしたわけさ。

「じゃあ今日は文字の書き方、読み方を勉強しますよー」

「「「「「はい！」「」「」」」」

うん、字まだマスターしてないんだ てへぺろ（・>）

ごめんなさい、またまた調子に乗りました。反省！

うーん、テンションがおかしい…

普段はこんなキャラじゃないってことを理解しておいて欲しいな。

さて、閑話休題話を元に戻してつと

いや、少しぐらいなら読み書きできるんだよ？

日常的な奴ならね。

だから僕が今から習うのはちょっとした発展系になるわけさ。

さーてちゃちゃっと覚えてしまいますかー。

「いやー、疲れたねー」

「ソダネー」

あ、このカタカナしゃべりの子ですがね、僕の隣に座ってた子ですよー。

名前はえーと…

「モブ男君！」

「ダレガモブオダツ！？」

「え？違ったつけ？」

「テメエナメンナヨ！オレノナマエハ！モ「アテオリア君ちょっと来てくださーい」「はーい」チョッ！？オマ！」

モブ男君なんか言っただけど先生に呼ばれたので失礼させてもらった。

後でモブ男君には謝っておこう。

「なんですかー？」

「あー、アテオリア君が習いたいことについてちょっと訊いたときたくてね。ごめんね、お友達とお話してる最中に呼び出しちゃって」

「大丈夫ですよー。それで訊きたいことって何ですかー？」

「えっと、アテオリア君が特別に習いたいのは地理と歴史と戦闘技能でよかつたんだよね？」

「はいー、そうですよー」

そう、ここはアトリエ世界なんだよね、今は片鱗も見当たらない

けど。

だから町の外には魔物がいるのさ。

外に出るには戦闘技能が必要不可欠なわけ。

「うん。わかったわ。いや、歴史を君みたいなお子供が習いたいって
いうのは珍しいからね。確認したかっただけなのよ」

さっきここがどこか分からないって言ったよね。

そのことなんだけどさ、僕はもしかしたら時代すら違うんじゃない
かなと思っているわけなんですよ。

いや、勘なんだけどね？

ただ気になったからさ、習っておこつかなーって思ったわけですよ。
違っかったら違っかったで別にいいんだけどね。

ということで、ここはどこで、今がいつなのかを僕は知りたいの
ですよ。

ーしょうげきのふあーすとぶじゃなくてじじつ！

あれから先生の質問を訊き終えた僕はお腹も空いてきたことだし

帰ることにした。

帰り道、他の一緒に勉強してた子たちと別れの挨拶をしていて気づいたことがある。

そう、モブ男君に謝るのを忘れていたのだよ。

まあ今生の別れじゃないしいいかな。

明日から忙しくなるぞー！

朝になり、歯を磨いて、顔を洗い、服を着替える最中にようやく目が覚めた。

うん、仕方ないじゃない。僕は朝が弱いんだ。

まあ、目も覚めたことだしと母さんの作った美味しい朝食を頂き家を出る。

これが日常になるんだろーなー。

「いつてきまーす」

近所の子たちと道中を共にして行く。

途中すれ違ったおじさんやおねーさんたちに挨拶しながらみんなとなかよく登校さ。

ふふ、微笑ましい光景だろう？

着いたら今日の授業が始まる。

モブ男君にはきちんと昨日の件は謝っておいた。

「ワカレバイインダヨ、ワカレバ」

とか言っただけどいまいち会話が噛合っている気がしなかったのは何故だろうか。

まあ、小さいことを気にしても仕方ないよね。

そろそろ授業だ。

ふう、今日も疲れた。

でも楽しかったよ。

友達もたくさん出来たし、いろいろと知れたしね。

そついろいろだ。

ここはいったいどこだったと思う？

びっくりしたよ…

まさか予想が当たるなんてね…

ザールブルグ？グラムナート？ケントニス？いいえ

じゃあアーランド？それともアールズとか辺境の地？

とんでもない！

じゃあ何処なんだよ！といった質問にはこう答えましょう！

“あのね、ここはどこでもなかったの”

うん、えーって思った。

それでさ、歴史を習ってて気づいたんだけどさたぶん時代が遙昔なんだよね…

びつくりだよねえ。

まあ、こうなったら仕方ないからさ気にせずに生きていこうか！

それでさ、何処でもないとか言っというてすぐにで悪いんだけどさ、地形から判断してなんだけど多分ここアーランド地方だと思うんだ…

アーランド国が無いから地方って言い方だけどね、多分あってると思う。

僕の勘がそう告げている！

と、まあ冗談はおいといてなんだけど、機械とか普通に発達して

るんだよね、今更だけど…

だからさ、以前から違うんじゃないかなーとは思ってたのよ。

そのときは必死にここは違う大陸なんだって言い聞かせてたんだけどね。

うん。世界地図見せられたら反論なんて出来ないよ。

文明発達しすぎじゃない？

もうちょっと夢を見せて欲しかった…

衝撃の事実でした（まる）

02 | 現状把握は大事なの（後書き）

話が短すぎるための苦肉の策！

本来なら2話に分けるところを1話にまとめることで文字数がなんと2倍に！

最終的な目標は1話につき4000～5000字なのですが届きそうにねえ！

まあ精進あるのみですな

8 / 4 分割表示取り消しました

03 | いざ行け、勇ましく

「これが、ぼくの！ちからだぁーっ！！（笑）」

はろー。

前回から5年ほど経ちました。今ではもう11歳です。アリアですよー。

え？跳びすぎ？

仕方ないじゃないさ。

勉強して、戦闘訓練してるところの描写なんていらないでしょ？

まあ、あえてこの5年で僕が得たことをあげるならばそうだなあ・

・

僕が機械に詳しくなったっていうのと魔術が使えたってぐらいかな？

え？それは描写をきちんと入れるべきだって？

まあ、確かに大事かもしれないね。

でもさ、機械の方はこの世界に生まれてからずっと親しんできたものだしなんか今更感がさ・・・ねえ？

それで魔術の方なのですがッ。

道具作成スキルと陣地作成スキルのどちらにもいえることだと思うんだけど、スキル自体がF a t eから持ってきたものじゃない？

自分で考えたものを貰ってきたわけじゃ無いんだよね。

そう、どちらのスキルも魔術師であることがスキル行使の前提条件ってわけ。

道具作成のスキル説明文を思い出せばいいんだけど・・・

道具作成：魔力を帯びた器具を作成できる。

なんだよね。簡潔に言うとか。

つまり、魔術回路とかが必要になってくるんだよ。

それでだと思っただけど、僕の体にありました。魔術回路。

サービスいいよねー。

あ、気づいた理由は簡単。

僕ってこの間はおしえなかった特技っていうか趣味があるんだけどさ。

おもちゃ作りが好きなんだ。

前世ではそんなことしたこと無かったのに、今はいつの間にかこれが趣味になってたんだよね。

たぶん道具作成スキルがあるからだろうな。

ある日ふとしたときに自分の作ったおもちゃが僕の理想道理の動き方や硬さになったりしたんだよね。

多分無意識に魔力を使ってたんだと思うんだけど、そういうおもちゃを作った日って体がとても重くなった気がしたもんだよ。

とまあ、そんなこんなで気づいたんだ。

それでさ、話を戻して僕の魔術回路についてなんだけどね、メデアのキャスタースキルを想定して頼んだから分からないんだけどさ、僕の魔術回路ってすごく質がいいっていうか、回路の本数がすごく多いと思うんだよね。

存在に気づいてから、ちょっとびびりながらも魔術回路を起動してみたんだけどさ、体中痛くてのた打ち回っちゃって両親に心配かけたりしたんだ。

いや、あせったわー。魔術回路なめてた。ぺろぺろしてた。

想像が甘すぎた。静電気レベルなわけないじゃんね。

雷が直撃したかと思ったよ・・・

実際はスタンガンの5倍位の威力を受けた感じかな。くらったこ

とないけど・・・

ま、まあ想像以上の痛みだったよ…

体が回路の存在を完全に認めてるからだと思っけど2回目からはちゃんと耐えれたよ。

スイッチを作ったからかもしれないけどさ。

ちなみにイメージは最初の痛みをもあつてか落雷となりました。

それでまだ慣れてないから詳しくは解んないんだけどさ。

さすがに今はまだ道具&陣地作成のスキルランク低いんだけど、頑張ればたぶん超一流まで届くって感じ。

へたしたらメディア超えちゃったりしてね。わははー。

って笑えねー。確かAランクで擬似的な不死薬だったでしょ？

錬金術って簡単に言えば道具作成じゃない？

しかも行き着くところに不死薬やら若返り薬やらがあるし・・・

本当にAランク超えちゃうかも・・・

まあ、何はともかくだ。どっちも今はDランクぐらいかな？

このスキルはおいおい伸ばしていけば良いやってことで。

とりあえず大事なのは魔術回路が具わっているってことだからね。
いやー回路を体になじませるのにいっぱいっぱいの5年だったよ。

なじませるのに時間を使いすぎて特に語ることは無いぐらいにね。
そっぴらば魔術基盤とかどうしたんだろーね？

まあ基盤自体はもともあって、今まで僕以外に使った人がいなかったのかなと素人ながらに予想を立ててはみるけれど。

そして僕はこのF a t e式魔術を誰にも教えず、秘匿し、魔術基盤を独占する気満々であります。

っていうか多分今後も使える人なんていないだろうしね。

教えるだけ無駄でしょ・・・

それに今まで言っでこなかったけどこの世界にはこの世界の魔法があるしね。

アトリ工式魔法、僕も戦闘技能を学ぶときに教えてもらったよ。

ちゃんと使いこなせるし。

機械と魔法の両文明が発達してるってすごいよね。

高度に発達した科学／魔法は魔法／科学と区別がつかないっていう言葉があったけどさ、この世界はきちんと別々に発達してるように思っただよね。

いや、勘だけど・・・

と、まあそんなこんなで驚きのスキルを会得しつつ僕は戦闘技能を履修完了したわけだ。

だから今日から僕も一人の冒険者として生きていくよ！

「父さん、母さん行つてきます！」

「ああ、行つて来い。いろんなところに行つてたくさんの経験をつみ、立派な男になつて来い」

「いつてらっしゃい。危ないところには行っちゃ駄目よ。自分の身の丈にあったところを冒険しなさい。それと、いつでも帰つてらっしゃい」

「うん。わかった。ありがとうね。行つてくるよ！」

「「行つてらっしゃい。元気にな／ね」」

こうして得た力を持って魔術師アリアの旅が今始まる！！
なんて
やって

03 | いざ行け、勇ましく（後書き）

あっち書いて、こっち書いて、設定見直して、どこ書いてたか分からなくなっ

ってやってたらもう話がごちゃごちゃになってしまいよったわwww

そして毎度のごとくみじけえ

読み辛いと思われますが勘弁してください

04 | 復習って大事！

― せいちょうするのよ！

さて、僕の戦闘スタイルについて話をしておこうか。

まず、近接に大剣。

あのさ、モンスターハンターってゲーム知ってる？

知ってたら早いんだけど、あんな感じの大剣だと思ってくれれば良いよ。

幸い、もともと身体能力が高かった上に、魔術による強化で底上げしてるからね。

結構すばやい動きが出来るんだよ。

いやー、最初、大剣に行き当たるまでは鉄塊を振り回してたんだけどね、それを見た鍛冶屋のおっちゃんがさ、

「おらあ職人だ！てめえの満足いくものも作れねえんじや職人の名が泣くぜ！ちよいと待ってる！！ちゃんとした剣を作ってやつからよー！！」

って言って作ってくれたんだ。

オーダーメイドの特別製になるから普通の剣より値が張ったけど実は家って平民の割りに結構裕福だったんだよね。

問題なく買えました。父さんありがとう。

ちなみに、子供がそんなもの使えるということに対して別段なんとも思われてませんよ？

周囲の人の反応は「ああ、あの子なら仕方ないか」みたいないつも通りの反応でしたもの。ええ。

だから別に泣きそうになってなんかいないんだからねッ！！理解される必要はないもん！

う、ごほん。気を取り直して中距離にいこうか。

中距離は魔法だよ。

アトリ工式のね。

アトリ工式のを魔法、型月式のを魔術と分けて区別させていただいておりますよ。

で、魔法なんだけど、簡単に魔力をそのまま撃ちだすものしかまだ使えません。

あつ、魔法での身体強化つてのも使えたわ。魔術に比べて微々たる程度の効果だけだよ。

でも、たぶんこれのおかげで大剣使用にそこまで疑問を持たれて

ないのよ。

僕の町に大剣を使用する人がいなかったってだけで、力自慢の冒険者は探せば普通にいるしね。みんなムキムキマッチョなおっさんだけど・・・

つと、話を戻して、魔法はいずれ高威力の炎とかを撃ちだしたり出来るようになるんだ。

僕もそこまでいけると良いな・・・

さて、最後は遠距離だね。

まあ、遠距離って言っても、今はまだ魔法にあまり頼ることが出来ないから中距離の時点で頼らせてもらってるんだけど・・・

さて、遠距離ですが、僕は銃を使わせてもらっております。

といっても威力はそんなに高くないよ。

威力の高いものは護身用としてとかで貴族なんかが所持しております。

いつか自分で、高威力のものを作って見せるよ。この道具作成スキルを行使して！

そういえば身分についても説明してなかったね。

大まかに分けて王族・貴族・騎士（貴族）・平民となっております。

騎士は特権階級で一応貴族として名を連ねるって感じかな。

まあ、もともと騎士になるのは貴族出身者が多いからその辺あまり気にしないでいいと思うよ。

それで基本的に王政がどこの国でも敷かれているのさ。

ああそうだ、ゼロの使い魔って知ってる？

あんな風に貴族が俺様が一番偉いんだぞーってやってるわけじゃない。

確かに権力をかさに悪事を働く奴もいるけど、そんなのごく一部だし。

アトリエ世界感溢れる信頼と実績の政度だよ。

優しく、気安く、生き生きとみんな生きてる。

さて、ここまで脱線しつつも僕の戦闘方法を語っていたわけだけ

ど、今現在基本的に頼れるのは近接戦闘だけなのです。

他はみんなお粗末なのです・・・

しかも、その近接戦闘に関しても2つに比べてまだマシってだけで上手ではないのです。

なぜなら僕は頭脳労働のほうが得意だから！

僕が冒険者として旅に出る理由は錬金術を学びたいというのと、好奇心によるものですよ。

ええ、錬金術。錬金術士が周りにいなかったなので今まで学ばせんでした・・・

風の噂すらも聞かなかったけど、きっとどこかにいると信じて！僕は旅立つのです！！

そう、アトリエ世界に来た理由の8割がこれにあたるといっても良いでしょう。

学びたい、好奇心旺盛なのですよ、僕は。

いろんなことを知りたいお年頃なのです。

そんなこんなで僕の知識を得、師を仰いでサクセスの成長ストーリーが始まる！（そんな風に考えてた時期が僕にもありました…）

— やってみなくちゃわからない！

冒険者として、初めての経験を僕は今つむことになる。

vsウォルフ

ええ、最初はプニじゃね？って思ったけど仕方ないじゃない。

僕は悪くない！僕は悪くない！！ちゃんとテリトリーに入らないように注意だっしてたんだから！！

と、自己弁護はほどほどにして冷静に状況判断をだな・・・

お腹が空いてるのか必死にこっちを追いかけてくるんだもの。

逃げ切れなかった・・・

幸いはぐれだったから一対一ですんだけど。

グルルルッ！

ガウッ！

考えすぎて注意が逸れちゃった・・・

完全に逃げられないな、よし戦闘だ！

相手と向き合い剣を正眼に構える。

睨み合い、隙の探しあいだ。

一人旅って難しいな・・・

おっと、また思考が逸れた。

グワアアウ！

逸れた隙を狙ってウォルフが飛び掛ってくる。

追いかけている最中に嫌というほど解っていたけど、すばや
い。

でも、ただ単に突進してくるだけなら何とかなるよ！

「やあっ！はあっ！！」

ガキンツ！

大剣を盾にガード、ぶつかって怯んだ瞬間になぎ払う！

キャウン！

「今度はこっちの番だ！」

吹き飛ばしたところに追撃をかける。

遠心力を使うから隙は大きいけど、相手もたぶんあまり戦いなれ
てない！

このままこっちのペースで全てを終わらせる！

きっとベテランの人から見たら滑稽に見える剣捌きで必死になって攻撃する。

子供ではあるけれど、魔術による強化で大人の、それも冒険者並の膂力を持っている自信がある。

しっかりとあてれば一撃で決まる！……はず……

「！—く」

ウォルフも一撃でも決まったらやばいと気づいているのか必死になっ
てよける。

さすがに全部を避けきることは出来ず、末端部分は怪我を負っているけどね。

それでも、逃げ出そうとせず、たまに反撃しようとするのはさすがだなと少し感心していた。

しかし、いつまでも避け続けることは出来ない。

ついに一撃が決まり、ウォルフは倒れた。

そのことに僕はついに終わったと気を緩めてしまったのだ。反省。

ウオオオオオオオオオオオオ
ンツツツツ！！！！！！

いつの間にか立ち上がり、これまでとは比べ物にならないぐらいの鳴き声を上げて突っ込んできた。

それを僕は威圧感から動けずに、きつと最期の力を振り絞ってだろっ一撃をうけてしまった。

強化のおかげか、幸い大事には至らなかったけど、それでも僕は決して小さくないダメージを受けてしまった。

安全な場所に退避し、傷薬を使い癒しながら今回のことを反省する僕である。

魔物の生命力の強さを侮っていたよ。

訓練中、プ二と戦った時にしっかりと教えてもらったはずなのに。戦後も気を抜かず常に気を配らなければいけないのに疎かにしていたな。

旅に浮かれていたなんて言い訳は通じない。

今回は良かったけど次もまた大丈夫だという保証は無いのだ。

気を引き締める必要を痛感したよ。

他にもエトセトラ・エトセトラ・・・

さて、何時までも反省をしてても仕方ないよね。

さっきは身の安全のために気にしなかったけど戦利品をとりにかなくちゃ！

そう、剥ぎ取りだ！

ゴソゴソ

てててーん！獣のしかばねを手に入れた！

剥ぎ取りとは、魔物を倒したときに出るドロップアイテムを頂くことをいうのです！

その方法はね、倒した相手から骨やら皮やら肉やらを剥ぎ取るのではなくてですね。

なんていうか、倒した魔物の核？を攻撃するとそこから出てくるですよ。

そして、そのアイテムを頂くと魔物は光になって消えていくのです！

よく解らない？僕も解らない！

でも仕方ないじゃない、そういうモンなんだよ。

まあ、そうして手に入れた獣のしかばねをバックに入れて僕は歩き出した。

油断大敵。実際に体験してよく解った。

しかし、今回の失敗を次に生かし僕は錬金術士を探すのだ！

いざ行けアリア！まだ見ぬ世界が君を待っている！なんちゃって

ってこれ二度ネタじゃん！

04 | 復習って大事！（後書き）

くっ！戦闘描写は苦手だ・・・

出来るだけ避けたいところだな・・・

しかし、書かねば上達しない。

これがジレンマというものか！

05 | これからどうする？

— はやまってみた

旅立ちから3年経ち、今や僕は14歳になった。

この3年間の間に僕の冒険者レベルもだいぶ上がり、中堅冒険者といってもいいほどに成長したのです。

剣術もそれなりになったし、銃だって自作してやった。

しかし、なんといっても魔法かな。

魔法の扱いが格段にうまくなったんだよ。

いやあ、ある日魔法がなかなかうまく出来ないことにむしゃくしやして魔術と組み合わせてみたんだけどさ、それが大成功！

大きな壁をぶち壊したかのようにそこからはとんとん拍子でうまくなっていったんだ。

今では魔法の腕はもう上級であると自負しているよ！

それでさ、ある程度強くなったことだし工房を作成してみようと思うんだ。

今までも工房は作ってたんだけどね。

もうちょっとランクの高いものがほしいわけよ。

今までの旅で獲た戦利品や、採集物をきちんと保管できる場所が欲しいし、銃なんかの改造や、メンテナンスの出来る工房がさ。

ちなみに現在の陣地作成スキルのランクはC+。

それなりのレベルの魔術師が作る工房と同じぐらいのモノが出来るよ。

工房攻めするにはちゃんとした情報に念入な準備、死の覚悟が必要となるね。

別にこの世界の人たちに見られて困ることは無いけど、スキルランクを上げたいからさ。

全力を尽くすよ！！

そうして作った工房の名は『アリアのアトリエ』

まだ錬金術士じゃないってーのm9

ーとうは！

アリアのアトリエ（笑）を作ってから僕は今まで以上に素材の収集に励んだ。

もちろん錬金術士探しの傍らね。

それでさ、世界中を探し回っても錬金術の錬の字も見当たらないってどういうことなの？！

影も形も見当たらないよ。

もしかしたら人の全く寄り付かない秘境なりうる場所にいるのかと人が全く寄り付きそうに無いところに行っても、そこにいるのはワイバーンやら黒角獣、はたまたベヒモスなんていったボス級モンスターばかり！

おかげでレベルは上がり、珍しい素材は手に張ったけどさ！全く見つからないんだよ！錬金術士！！

いつの間にか1年経ってたし！

いくつか技まで編み出しちゃったよ！

もう冒険者としてベテランだね・・・

二つ名まで付けられたよ・・・

【踏破】だつてさ。

世界中を歩き、強力な魔物を数多く倒してきたことから付いたんだ。

・
この間、依頼を請けに行ったときも難しそうなのを回されたし・

なんだよドラゴン討伐って・・・

いいよ、やってやんよ！とやけくそになって挑んできたさ。

結果？ウサ晴らしは出来たと言っておこうかな。

はあ、これだけ探しても見つからないってことはもしかして・・・

錬金術士いないのかなあ？

05 | これからどうする？（後書き）

今回はかなり短くなりましたが、これは次話以降のためのつなぎと
いうことでよろしく願います。

ちなみに・・・

11歳	14	15
冒険者レベル	2	28
43		
錬金レベル（道具作成）	3	7
10		

06 『アリアのアトリエ』(前書き)

後書きに言い訳をちよろちよろと・・・

06 『アリアのアトリエ』

— ひらけーごま！

あれだけ探しても見つからなかった錬金術士。

きつといないのだとあきらめることにしました・・・

しかし、師を探すのを諦めたのであって、錬金術士になるのを諦めたのではないのです。

そう、自己流でやればいいじゃない！

ということで16歳になった僕は冒険者を半ば廃業して錬金術士を目指すのです！

幸い工房は人気ひとけの無い森に作ったので誰かに邪魔されるとい
とは無いでしょう。

工房をちよろりと調整しなおして・・・

レッツ錬金！！

しかし当然のことながら上手くいくはずも無く・・・

四苦八苦。レシピが無いことには簡単な調合すらも出来なくて行き詰ってしまったのです。

「魔力の通し方なんかは道具作成スキルを応用すればどうにかなるとしても、レシピが無いことには何をすればいいのかもわからないよ……」

一人弱音を吐くこともしかたのないことでしょう。

そして僕は閃いた！ピコーン

レシピが無いなら作れば良いじゃない！

おい、レシピ作れるなら今までの悩みは要らなかっただろうが！
っていう突っ込みは無しよ。

そうだな、正確に表現するならばレシピを作るって言うよりも、
レシピを思い出すって言ったほうがいいかな。

そう、ゲームで出てきたレシピを思い出しまとめるのです！！

ということであつとばかりお待ちを……

ふふふふふ、思い出せねえorz

いや、思い出せる方がおかしいのか？

しかし、これでまた行き詰まっちゃったよ・・・

くそう、いいアイデアだと思ったんだけどな。

はあ、レシピが魔法の泉のように湧いてくれればなあ・・・

ん？魔法？いや、魔法ではちょっとあれだから魔術で・・・

結果、レシピを抽出することが出来ました！

魔術って言うのは知恵の塊、神秘の塊だからね。

記憶を引き出すのは思いつけば結構簡単に出来たよ。

さあ、錬金の時間だ！

何をつくろうかな？

まずは簡単に中和剤にヒーリングサルヴでいいかな

どのアイテムを使おうかな？

最初はお試しに特性を考えないで作ろうか。

中和剤には水、ヒーリングサルヴにはマジックグラスと水でいい

や！

よし、始めるよ！！

まずは中和剤から。

水に魔力を通してつと、出来上がった中和剤をイメージして・・・

ぐるぐる、ぐるぐる

できたあ！！

やれば出来るもんだね！

この調子でヒーリングサルヴも！

最初にマジックグラスをすりつぶして、おっとその間にもう一つのマジックグラスを水に付け込んで、魔力を使って成分を抽出しておかないとね。

ゴリ、ゴリ、ゴリ

っとすりつぶしてとちょっと乾燥させないと・・・

乾燥中に漬け込んだ方を確認しとかないといけないや。

うん、いい感じに成分が出てるみたい。

じゃあ乾燥待ちの間にレシピを記しておこうかな。

こうして、書くことで穴無く覚える事が出来る様になるだろうしね。

ん、そろそろいいかな。

うん。ばっちりだよ！

じゃあこの乾燥させたマジックグラスと水を合わせてつと。

ぐるぐる、ぐる、ぐる

よし、できたあ！！

初めての調合、不安もいっぱいあったけどこれから頑張ってい
こー！

そう、ここに『アリアのアトリエ』Openを宣言します！

お客は現在募集しておりません！あしからず！！

06 『アリアのアトリエ』（後書き）

短いです。ええ。

・ し、しかし、これは錬金術士編のプロローグだから云々かんぬん・

さて、調合シーン書きましたがあそこは悩んだ。

ゲームみたいに壺？に入れてかき混ぜるだけで出来るわけが無いのである程度の下ごしらえを入れるということにしましたが全部想像のものなのでね、これつくるならこういうことしないといけないんじゃないか？っていうことで適当に場面を想像して書かせていただきました。

批判があるなら受け付ける！

というよりアイデアが欲しいレベル・・・

後作者、メルルのアトリエしかプレイしたことが無いです。

よって、調合方法がアーランド式もつと言っならメルル流となっております。

ロロナやトトリのwikiなんかを見てもいるのですがいまいちぴんとせず・・・

況やザールブルヤにグラムナートって感じです。

許してね！

07 | 目標は常に大きく持たないとね！

— めぎせ、ばんのうのれんきんじゅつし！

順調に錬金レベルを上げております、アリアです。

素材集めはもともといっぱい保管していたので毎日のように調合
三昧。

たまーに、足りなくなってもそこはほら、【踏破】とまで呼ばれ
たこの僕の力でちょちよいとね。

もう毎日が充実してすごく楽しいんだ！

まだ簡単な調合しか出来ないけどさ。

それでも、アレンジとか入れたりして、新しい物を作ったり、素
材をケチる方法を探したり、手抜きの方法を実践したり、品質向上
や効果UPを図ったりなんかしてるんだよ。

考えることがとても楽しいんだ！

楽しくて楽しくて時間を忘れて食事や睡眠を怠って倒れるほどに
ね！

うん、誇れることじゃないのは分かってるよ・・・

はあ、旅してるときも思ってたけどこういつとき一人ってのは困るんだよね。

倒れても介抱してくれる人がいないとかさ・・・

しゃべる相手がいないってのも結構な問題だね。

一応、食糧なんかを買いに町に下りたときに世間話ぐらいはするけどさ、頻度が少ないんだよね・・・

じゃあ誰かお手伝いさんとか頼めば？っていうのは無しだよ。

誰にも邪魔されたくないからね。

だからこそ辺境の人気の無い地にアトリエを作って、魔術を使つてまでして隠匿してるんだし。

まあ、とにかく錬金術がとても楽しいんだ！

それで、お金も冒険者時代に稼いだのがまだたくさん余ってるからさ、こないだちょっと施設拡張までしたんだから。

何が出来るようになったと思う？

ふふ、インゴットが作れるようになったのです！

クローヌは普通に作れたんだけどね？インゴットがまだ作れなかったんだ。

だから必要な設備に工具をこの間用意してきたのさ！

あ、もちろん自分でやりましたよ？溶鉱炉なんかもね。

いつか装備も自分で作るんだあ。

まあ、一流の職人レベルになるにはどれだけかかるかわかんないけどさ。

僕には若返り薬なんかのチートレシピがあるからね、時間はいくらでもあるのさ！

まだ製作不可能だけど・・・

作れないまま一生を終える可能性もあるけど・・・

とりあえず作れると仮定して話を進めるんだよ！

それで、装備をさ、自分で作るって今言っただじゃない？

それにはちゃんとした理由もあるんだよ。

それはね、錬金術で作った特殊な特性のついたインゴットを世に出すのが嫌だからさ！

別にケチなわけじゃないよ。

騒がれて僕の邪魔になるのが嫌なだけ。

それだったら多少面倒でも自分で作る方がいいと思ったんだ。僕はね。

目指すは何でも作れる万能の錬金術士！

アテオリア・カテライト頑張ります！

アテオリア・カテライト

男

06 07にかけて

年齢：16 17

冒険者レベル：43 44

錬金レベル：11 19

07 | 目標は常に大きく持たないとね！（後書き）

05・06と短いのを連続投稿して今話もまた短くなってしまいました・・・

何故長くかけないのか？

これからも精進していききたいですね

08 | あくどい錬金術士

— おうかん

初級錬金を極め、いまや中級に臨んでおります。アリアです。

今日は既に一度作ったことのある「知恵者の辞典」を大幅アレンジしてみたいと思うのです。

どうするのか、それは！

僕とリンクを結び、僕の知識、記憶、経験などあらゆることを書に転写するのです！

魔術を使って自身の記憶を取り出せる僕が何故そんなものが必要なのか、ですか？

いちいち調合のたびに魔術を使うのはめんどくさいからです！！

そ、それだけじゃないのですよ・・・

なんといつでもこの方法を使えば他人の知識をも識^しることが出来るのです！フッフ・・・

例えば、鍛冶屋のおっちゃんを眠らせラゲフンゲフン・・・もといおっちゃんに協力してもらい書に鍛冶の仕方を載せます。そして書と僕をリンクで結ぶことでおっちゃんのベテランの知識、経験なんかを全て頂けるといふ寸法です。

ずるくはないのです。

これもまた一つの弟子入りという奴なのです。

証拠も残さず、足が付かなければ何の問題も無いのです。

作ったものを売るつもりも無いので営業妨害にもならないのです。

他人には全くこれっぽちも興味が無いので、プライバシーの侵害をするつもりも無いのです。

よし、言^{武装}い訳完了！

ということで作るのです。

えーと、材料材料・・・

アレンジに以前作ったこいつを入れて・・・

後はこいつでいいのかな・・・

よし、始めるよ！

とりあえず知恵者の辞典を作る要領で、魔術を使って・・・

<ただいま錬金中　しばらくお待ちください>

よし、次はこの魔法の絵の具を・・・

<ただいま錬金中　しばらくお待ちください>

うん、いい感じ。じゃあ、後はこれを・・・

<しつこいようですがただいま錬金中です　申し訳ありませんがしばらくお待ちください>

よし、最後に魔術で・・・

<本当に申し訳（ry）>

出来たー！ー！！

いやー、疲れたよ・・・

え？8日も調合に時間かかったの？！

ま、まあ知恵者の辞典自体が3日かかるしね・・・

アレンジしてたらこれぐらいはかかってもおかしくはないか・・・

ただ、予想してたよりかは難易度高くなかったな・・・

ま、そんなことはどうでもいいですよ！

今は機能のチェックタイムなのです。

調査中既にリンクは結んでいたので転写は済んでいるはずなので
すが・・・

パラパラ

む、むむむ、むむむむむ！？

よく出来ているのです。

おや、これは？

確かに僕は生前暇なときにいろいろと調べたりしていたのです。

しかし、こんなことまで引き出せるのか。

ほう、ほうほう。

なるほどなるほど・・・

僕はなんてすばらしいものを作ったのでしょうか！

なんとこの書、一度チラッと見たものまで詳細に記されているのです！

頭に入っていないようなものまで転写できるなんて！！

僕は擬似瞬間記憶能力を手に入ってしまったのですよ！

wikiなどを流し視していた事がある僕としてはもう最高ののです！

濫読していたものまで転写されているなんて！

興奮が冷めないのです！！

この書の名前どうしようかな・・・

ビビッと来ました！

『王冠の書』これでいきます！

アテオリア・カテライト

男

07	08	にかけて
年齢：17	18	
冒険者レベル：44	45	
錬金レベル：19	38	

08 | あくどい錬金術士（後書き）

1週間放置しといてこの短さ、この出来・・・

デフォルトです！

そして手抜きはしていません！

手抜きじゃないのです！！

今後もこのような感じになりますが良いですか？

精進はするつもりですが進歩しないのです・・・

ま、まあ頑張るのでよろしく願います！

09 | 最終目標？

― けんじゃたいむはいりまーす

ついに、ついにこのときが来た。

錬金術士が最終目標とするほどの神秘の調合をするときが！

そう、賢者の石を作るのです！！

賢者の石

一般によく知られた賢者の石は卑金属を金などの貴金属に変えたり、人間を不老不死にすることができるといふ。霊薬としてのエリクサーと同様のものとして考えられることもある。 [by Wiki](#)

となっているけれど、このアトリエ世界での賢者の石はちょっと効果が違う。

とても密度の高い神秘性を秘め、魔術の最高の媒体になるのだけれど、おもに中和剤／宝石類／薬の材料／鉱石類／エリキシルの材料となる万能といっても良いほどの多様性にこそ、その価値がある。

そして、賢者の石を使い調合し、生み出される物が金なり不死薬だったりするのです！

まあ、不死薬については僕が材料の一つとして賢者の石を使うことを決めているからこそいえるのだけど・・・

とにかく作ってみないことには始まらない。

魔術的要素も取り入れた僕の調合でアトリエ世界通りのものが出るかどうかが微妙なんだ。

これまでに作ってきたものたちもたまにゲームとは効果が違ったりしたしね。

まったく、それが全部プラス要素ならよかつたんだけどな。

良いものが出来れば悪いものが出来るときもある。

幸い、個別に違うだなんて不安定なものではなく、種類別だったからそういうものは次回から気をつけられただけだからいいけどさ。

だいたい説明できたしね。

何時までも不安定なままにするわけ無いでしょ。

確実ではないけど大体あたりをつけているんだよ。

食べ物関係はあまり変化なし／薬関係はたまに危ないけどおおむね効力up／爆弾は威力up／材料系は用途しだいとなれば大体解るさ。

そう、基本的に強化されている！

薬の場合、行き過ぎれば毒になったりするじゃない。そういうことなんだよ。

でも薬、そう薬が不安定なのがいけないんだよね・・・

僕が目指してるのってさ不死薬じゃないか。そう、不死薬！

これを強化したらどうなるのかっていうのがいまいわからないんだよねえ・・・

もしかしたら強化が起きないかもしれないし、マイナスされるかもしれない・・・

いつそ、魔術要素いれるのやめようかと思うけど・・・

もういいや！不死薬作るときに考えればいいか。

厄介ことの先送り
と閑話休題！

とりあえず今から作る賢者の石を不死薬の材料にすると決まったわけじゃない。

効果が気に入らなかったら普通に調合しなおせばいいしね。

今回は魔術要素込みで作るよ！！

はあ、不死薬で実験出来れば楽なんだけどな・・・

l r y

さて、始めます。

材料は特殊な加工方法でのみしか使えない「無価値な岩」、エリキシルとして「豊穡の土」、そして「原初の土」、「世界靈魂」の4つを基本材料に魔術的要素を取り入れるためにいくつかのものを用意します。

すべて最高品質で調合を行いますよ。

少しずつ確実に作業を行いましょうか。

ただいま調合中です

ついにできた！作業期間24日！！

不眠不休で僕頑張った！超頑張った！！

効果も結構いい感じに安定してるし、これはもう完全に成功だね！

よし、この調子で他の素材アイテムを調合して不死薬にとりかか
るぞ！

アテオリア・カテライト
男
08 09にかけて
年齢：18 20
冒険者レベル：45 48
錬金レベル：38 48

09 | 最終目標？（後書き）

たくさんの文章が省略されました。（そういうことにしといて下さい）

もともと文章レベル低いのにスランプになんてなるんだね・・・

さて、主人公の口調がだいぶ乱れていますが半分くらいはわざとです！

半分くらいは！！

もう一気にいろいろすっ飛ばして他のキャラを出すべきか・・・

とりあえず不死薬作らせたらプロフィール出すかな・・・

うつ、早くヒロイン出せるようにしよう・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3988v/>

Alchemist farthest ~ 最果ての錬金術師 ~

2011年8月22日16時11分発行